支那骨董藝說

第三集

第三集

支稱曼董蕓鼓龍

崇文會發行

支那骨董叢說第三集目次

卷一　續陶器說

三代の瓦器
漢瓦
漢の壙甎
古大甎
漢の瓦盒
漢の瓦器
綠釉瓦器の漢物に非るを論ず
土鏽眞假の辨
瓦器の有釉と無釉の時代あり
蛇虎瓶

越窯
柴窯
汝窯
龍泉窯
汝窯と龍泉窯の區別
均窯
均窯紅斑と釉色との關係
均窯と元磁との區別
蟹爪紋の貴ぶに足らざるを論ず
定窯
南定窯
耀窯
耀窯釉色先後の別あり
耀窯と定窯との區別

磁窯
霍窯
廣窯
茶末の原流と茶色の變遷
插圖

卷二　硯石

端溪硯
下巖　水巖　中巖　上巖　新巖　半邊山諸巖　蛬坑
朝天巖　屏風巖　宜德巖　制式
歙洲硯
漢未央宮瓦硯
銅雀臺瓦硯
澄泥硯

產硯諸地
餘論
漆器
蛇腹紋と手皺文の由來
堆朱
螺鈿
銀器
銅器
錫器
竹器
插圖

引用書目

博物要覽　格古要論　洞天清祿　鐵網珊瑚
清秘藏　留青日札　文房肆譜　文房肆考
遵生八牋　潛確類書　通雅　陶說
博物彙志　窯器考　蕉窗九錄　窯器說
陶錄　韵石齋筆談　游宦紀聞　端溪硯坑記
端溪硯譜　端溪硯石考　說硯　端溪研史
端溪研志　端石擬　硯林拾遺　硯史
歙州硯譜　端溪研譜　歙硯說　辨歙硯說
清波雜志　夢粱錄　香祖筆記　春渚紀聞
春風堂隨筆　考槃餘事　墨娥小錄　池北偶談
居易錄　七修類稿　竹人錄　骨董十三說
中國藝術家徵略

支那骨董叢說第四集續刻豫定目次

一續陶器說（二）
一法帖
一古墨
一香
一茶具
一毛毯（緞通）
附骨董の字義

支那骨董叢說第三集卷一

氷壺軒主人纂述

○續陶器說（一）

本編第一集主として陶器の事を論せるも其の間尙ほ遺漏少なからず因て更に良書を旁求し且實物に就て研究し前者の缺を補はんとせしも人事牽紲、日月逾邁早くも三星霜を經たり、然るに近ごろ久しく燕京に在りし友人より博物彙志と題する一書を得たり、凡そ古銅玉窰器書畫の類其の論ずるところ一種獨得の見あり、從來行はるゝところの諸書互に相剽竊して屋上屋を架するものと大に其の趣を異せり其の文意によつて考ふるに著者は平生古玩を業とし先づ實物より入手し然る後之を載籍に徵して研究せるもの、如し故に其の說實驗より來るもの多し亦近時得易からざるの良書なり唯此の書非賣品に係るをもて我國に流傳

せるもの甚だ希なり因て先づ陶器の部に就き參考すべきものを譯出して本集の首に收め名けて續陶器說といふ、其の本文務めて意譯に從ふも尙ほ解し難きものは每項解釋を附し且己の意見あるものは皆な按字を附し一格を低ふして之を分つ、世の好事家或は先睹を快とせるものあらん

三代の瓦器

○三代の瓦器（末に圖あり）

三代の時瓦器を貴重せると猶ほ後世の磁器を貴重せるが如し、有虞の瓦棺は尊彝と並列し成周の世に至りては專ら陶器に關せる官を設け之を陶人或は陶正と稱す猶ほ今の官窰に陶造の官を置が如し

按ずるに瓦器は泥質にして釉水を施こさゞるもの即ち我國にて所謂素燒なり

夏殷周三代の頃は人心古樸にして質素を尙び日常の用具は素より祭祀にも瓦器を用ゐたるをもて其の形鼎彝尊罍に擬したるものあり而も大抵無地にして花紋なし、原本は一々圖を掲げ其の後に本文を載せあれど本編は印刷の都合

により圖は一括して卷末に掲載せり讀者參觀すべし

○漢　瓦（末に圖あり）

張華博物志に云ふ夏桀始めて瓦屋を作り昆吾之が爲に瓦を造ると乃ち屋瓦は夏の末に始まり其の前はすべて茅屋なりしと知るべし、然れど三代の瓦は花紋ありて文字なし、秦漢の瓦は花紋と文字と並び備はる其は他なし世の進化に從ひ漸く文飾を尚ぶに至れる故なり、秦漢の瓦其の形質略同じ然れど秦瓦には秦宮の名あり、漢瓦には漢宮の名あり固と辨別し難からず其の宮名にあらざるものといへど秦瓦には與天無極、維天降靈等の字あり、其の立言多く天命に托し尚ほ三代の遺風あり、漢瓦に至つては長樂未央、延年益壽等多く吉祥の語を取れり

按ずるに今傳ふるところの漢瓦硯は此の圖の瓦の當即ち圓形の部分を取り其の裏を瑩して硯とせるものなり其の詳しきは本集卷二瓦硯の部に見ゆ參觀す

べし

○漢の壙磚（末に圖あり）

壙磚長さ四尺寛さ一尺半、旁に漢篆もて長樂未央の四字あり此は漢の時砌壙に用ゐし物なり、論者未央の字樣あるに因て未央宮の物なりといへど其の說非なり、按ずるに未央は漢の宮名なり長樂は秦の宮名なり一物の上に兩朝兩宮の名を載すること理に於てあるべからず、蓋し長樂未央は本と漢時習用の一名詞なり偶ま宮名と同じきにより誤りて建宮に用ゐたるものと思へるのみ、又此の磚中空虛にして外に花紋あり人の目を悅ばすのみならず兼て發音に易し、故に好事者往々之を以て琴となす琴磚の名此より始まる、而して俗儒察せず、往々秦磚と稱す蓋し秦琴同音なるを以て遂に此の誤を致すのみ

按ずるに壙磚は陵墓或は庭砌間に用ゆる敷瓦の類なり其の中空なるは何の爲なるを知らず、長樂未央の四字を漢時習用の語となすは尙ほ可なれど長樂宮

未央長樂の說

は獨り秦のみならず漢にも亦之れあり漢書高帝紀五年後九月關中長樂宮を治す、史記高祖本紀七年長樂宮成る、八年蕭丞相未央宮を作り九年未央宮成る、三輔黃圖、明光宮は長樂宮の後に在り南長樂宮と相屬す等其の證一にして足らず、履園叢話に曰く長樂未央本と兩宮の名なり漢の瓦文之を合して一となすもの蓋し吉祥の語意を取り配合して文を成すのみ必ずしも未央宮に未央の字ある瓦を用ゐ長樂宮に長樂の字ある瓦を用ゐたるにあらざるなりと此の說明白信を措くに足れり

古大磚

○古大磚

大磚に二種あり、一は砌壙の用即ち長樂未央等の字を刻せるもの、一は墓誌の用即ち官銜職爵等の字を刻するもの是なり砌壙の用を爲すもの三代より以來之れあり予之を見る甚だ多し、惟墓志の磚は東漢より以上のものを見ず蓋し銘墓の事は東漢に始まる、宋周益公曰く東漢の墓に志す、初め猶磚を用ゐ後ち方

に石を用ゆと以て證すべきなり

按ずるに本文にいふ大磚は平板方形にして全く今の敷瓦の如し一面に長樂未央等の字を刻し一面に花紋を刻す(皆な陽文なり)其の色黝黑にして古色盎然尤も愛すべし今の世猶ほ多く得がたし、墓誌の用を爲すものは今の墓石の如し予は未だ之を見ず

○漢の瓦盒（末に圖あり）

此の盒狀ち二盤の如し一仰一覆故に又覆盤と名づく全身花紋なく又釉水を用ゐず形質頗る古なり頂上里君成廣の四字を刻す確として漢代の隸字に係る且其の造法極めて鄭重なるに拘はらず毫も釉水を用ゐず、漢時の瓦器官製私製に論なく一概に釉水なきこと推して知るべし

按ずるに盒は器の底と蓋と相合して物を藏するの器なり

○漢の瓦器（末に圖あり）

此の瓦器漢の時に始まるをもて呼んで漢瓶といふ三代の時絶て此の式なし漢の時此の類の瓶甚だ多し、幾ど漢の素環壺と等し、予屢此の種の瓶を見るも一も釉水を用ゐたるものなし、或は曰く漢の時瓦瓶頗る多し釉水の有無、一人の見るところを以て定むべからずと、然れど凡そ此等の瓦器は皆な土中に埋藏し最も多く出すを河南とし、陝西之に次ぎ山西又之に次ぐ他省は曾て有ることなし予屢此の三省に至り各處の發掘物を購ひしも終に釉水あるものを見ず故に漢の瓦器に釉水あるものなきと予深く確信するところなり

按ずるに三代の瓦器と漢代の瓦器と其の形式自ら同じからず卷末の圖を見ても其の一斑を知るべし

○綠釉瓦器の漢物に非るを論ず

綠釉の瓦器は皆な唐時の物なり中西人士其の式漢の素環壺と等しきをもて遂に目して漢器となし甚だしきは定めて趣窰となすものあり、訛を以て訛を傳へ牢

として破るべからず、蓋し漢瓦の釉水なきは前已に說る如く復た贅言を須ゐず又越窰は唐に創始り漢に始まるにあらず雞缸の歌に李唐越器人間無。趙宋官窰晨星看とあり此れ以て證となすべし

土鏽の眞僞

○土鏽眞假の辨

瓦器の土鏽あるを以て貴しとなすと人皆な知るところなり然れど土鏽に眞贋あり別せざるべからず、凡そ眞の鏽は器と合一して渾然間なし其の粘着せる狀態恰も流質物の凝結せるが如く而も其の色土の如く其の性極めて堅し如何なる方法を施すも決して剝落せず縱へ熱湯を注ぐも僅に一脈の土氣を發するのみ其の堅きと依然故の如し

按ずるに三代秦漢の瓦器概ね殉葬物にあらざれば世亂に遇ひて地中に埋藏せるものゝみ故に土鏽なければ眞となすに足らず此れ後世土鏽を僞造せる所以なり

土鏽の僞造法

土鏽僞造の法に二種あり先づ瓦器を以て膠水(膠を溶たる水)の中に浸し然る後細なる黄土を其の上に振り撒き、乾燥したる後口をもて浮土(粘着せざる土)を吹き去り其の厚薄を驗して若し其の土薄く器の地を洩らす樣ならば更に前法の如く黄土を撒くなり此すること數次の後は遂に眞の土鏽と異なるなし是れ第一法とす、他の一法は先づ火を以て瓦器を熱し稍紅色を呈する後白礬(明礬)を土に和して細末にせるものを以て其の上に振り撒き其の能く溶化して器面に粘着せるを俟て再び細なる黄土を以て之を蓋ふなり此すれば其の造るところの鏽、眞物と異なるなし是れ第二法とす

按ずるに以上二法を以て造るところの僞鏽殆ど眞鏽と異なるなきも第一法の鏽は熱湯を以て之に注ぎ刷子にて刷れば其の鏽即ち落つ間存するものあるも必ず粘着性を發現すべし又第二法の鏽は熱湯を注げば立どころに渙然氷釋す更に舌の尖にて試みれば自ら白礬の性を知るを得べし